会意文字と漢字教育

カイザー　シュテファン

要　旨

「会意」は六書の一つで、漢字の造字法の一つだが、その原理が正しく理解されているとは言えない。特に漢字教育における会意の扱いに問題が多い。二つ（以上）の構成要素がそれぞれある意味を表しており、その二つの意味が加算されることによってあたかもなぞなぞのように別の新しい意味が産出されるかのように説明されたりする（例えば、「屋根の下に女とは？平和！」）。しかし、それは誤った認識であるだけでなく、漢字圏以外の学習者にただでさえ取っ付きにくい文字である漢字をますますエキゾチックなものにしてしまう意味でも有害である（「日」と「月」を組み合わせることによって「（より）あかるい」意味が出てくるというような「論理」を学習者が納得してくれるはずがない）。本論文は、典型的な会意文字では、要素同士が同等に並ぶのではなく、もっとダイナミックな関係にあることを示すとともに、漢字教育に提言を行う。

【キーワード】 会意文字　音符　意符　甲骨文字　漢字教育

Compound Indicative Characters and the Teaching of Kanji

Kaiser, Stefan

“Compound indicative characters” (the translation term of *huiyi* in Chinese, or *kaii* in Japanese is due to DeFrancis 1989) is one of the six traditional formation principles of Chinese characters, but has hitherto not necessarily been understood correctly. This is particulary problematic in the teaching of kanji. Two (or more) formative elements are said to express two separate meanings, which are then combined to produce a new meaning that is so-to-speak larger than the sum of its parts, somewhat in the fashion of a riddle of the form “What ṡ a woman under a roof? Peace!”. However, not only is this a mistaken account of the compound indicative principle, it also serves to make kanji, a formidable writing system to master at the best of times, into an even more exotic system (has it ever made sense to any learner that a combination of sun and moon should be brighter that the sun alone?). This paper will examine the nature of the compound indicative formation principle and show that the formative elements are essentially not additive in nature, but combine in a much more dynamic fashion. Some implications for kanji teaching are presented.

１．問題の所在

「会意」はいうまもなく漢字の造字法を分類した伝統的な「六書」の一つである。後漢の『説文解字』では、象形と指事を「文」（単体の漢字）というのに対し、会意と形声を「字」（複合体の漢字）としていることからも分かるように、会意は二つ以上の要素を組み合わせることによって作る造字法の一つである（なお、残りの転注と仮借は漢字の用法に関する範疇と言われる）。一般に、会意は形声との対で区別されているが、以下に見るように「会意形声」というカテゴリーもあり、実体はもっと複雑である。しかし、会意は形声と特徴的にどう違うかは押さえる必要はある。

ただ、「会意」の原理が一般に正しく理解されているとは言えない。特に漢字教育における会意の扱いに問題が多い。独立要素としても使われ得る二つ（以上）の構成要素がそれぞれ別の意味を表しており、その意味が加算されることによってあたかもなぞなぞのように別の新しい意味が産出されるかのように説明されたりする。しかし、それは誤った認識であるだけでなく、漢字圏以外の学習者にただでさえ取っ付きにくい文字である漢字をますますエキゾチックなものにしてしまう意味でも有害である。

２．漢字学習書における会意文字に対する説明の例

漢字の学習書を見てみよう。例えば加納他（1990）では、第5課の内容となっているのが「意味の組み合わせからできた漢字」で、明・休・体・好などの漢字が導入されている。少し引用する。

（１）What does the Kanji「日」mean? It means‘ the sun.’What does the Kanji「月」mean?
It means‘ the moon.’Then, what do you think the Kanji 「明」means? It means‘ bright’!

（加納他 1990：39）

また、Kanji Text Research Group UNIVERSITY OF TOKYO (1993)でも、「明」に対して次のように説明している。

（２）When the sun and the moon come together, everything becomes bright.
(Kanji Text Research Group UNIVERSITY OF TOKYO (1993:177)

加えて、上掲書はいずれも会意文字の要素を「＋」印でつないでいる。

漢字学習書の説明は必ずしも記憶するための語呂合わせ的な方法と区別できるものではなく、例えば次のような例はどちらとも捉えよう。

（３）Sun and moon; *bright*.

(Lam and Shimizu 1995:43,「明」に対して)

Roof over woman; *peace*.

(Lam and Shimizu 1995:21,「安」に対して)

A person and his word implies *trust*.

(Lam and Shimizu 1995:138,「信」に対して)

いずれにしろ、上記のような説明は二つの要素が同等に扱われることによって、組み合わさる結果として静的な場合が多いことが一つの特徴として挙げられる。しかし、「会意」の本質は果たしてそれでいいかどうかという問題がある。つまり、それぞれの要素が同等ではなく、一方が他方に対してなんらかの働きかけをする可能性は原理的には否定できず、検討する必要がある。

３．「六書」の伝統的な考え方や説明

「六書」は漢字の伝統的な造字の分類方法で、『漢書』の「芸文志（小学家）」に次のように説明されている。

（４）古（いにしえ）は、八歳にて小学に入る故、周官に保氏国子を養い、六書を教えるを掌（つかさど）る。象形・象事・象意・象声・転注・仮借を謂う。字を造る本なり。

つまり、周代では、保氏が帰属の子弟の漢字教育を担当し、造字の基本を教えていたということである。上記の「象意」が「会意」にあたる。１世紀末の『説文解字』では「会意」という用語を使っているが、許慎による叙の説明がよく引用される。「会意」に対する説明を読み下し文にすると、以下のようになる。

（５）会意は、類を比（なら）べ、誼（意味）を合わせる。以って指譌（指示）を見（あら）わす。武・信、是なり。

すなわち、２種類の漢字を並べることによって、その組み合わせにより新しい意味を作り上げ、指し示すもので、武・信がその例となる。阿辻（1988:59-60）の説明を加えると、「会意の文字は、必ず複数の『文』からなり、おのおのの『文』の持つ意味の総合的な組み合わせによって全体の字義を示す。」ここでは、「総合的な組み合わせ」が一つのキーワードになるが、加算することによって新しい概念が生まれてくることで、各部分の合計よりも何か別の意味が加わるような意味ととれる。

４．甲骨文字における「会意」のサンプル調査

周知のように、「甲骨文字」は、商・周の時代に亀の甲や獣骨に刻まれた文字のことで、神意を確かめるための占いに使われた。Keightley（1978）が言うように、卜文は加熱によるひび割れが生じる前に彫られたものではなく、生じてから王の判断やその結果実際起きたことなどの記録として保存されたもの。甲骨文字は現時点で確認できる漢字の最古の姿である。従って、漢字の字源を考える際には、この資料を利用するのが適切である。

ただ、ある漢字が「会意」文字かどうかの認定にははっきりした基準がなく、個々の漢字については研究者や辞書によっても判断が違ったりする。ここでは「会意」は「形声」文字ではない（音符が認められない）複合体の漢字と考える。しかし、「会意形声」というべきカテゴリーも区別できるので、この方法はオールマイティーではなく、一つの作業仮説にすぎない（詳しくは下記 6. で取り上げる）。

一応「会意」とした個別の漢字の判断については白川（1994）（掲載されている範囲内）で確認し、最終決定を行う。なお、甲骨文字の資料としては石川（1996）を利用する。

石川（1996）では最古の第一期に属する甲骨文Ｂの比較的鮮明である①から②というテキストをサンプルにすると、総字数 106 字、異なり字数 68 になるが、7 字はよく分からないものなので、異なり字数 61 字ということになる。そのサンプルの中に（6）に示した八つの会意文字が見える（但し、「有」「在」などのように金文など後世の形から会意とされるもので、甲骨文では字の一部だけしかないものについては会意に含めなかった）。なお、字体などが現行のものと違うものについては、以下で詳細を述べる。

（６）弾・囚・占・茲・逐・馭・墜・夢

４．１　「弾」について

現行の「弾」という字は「単」という音符をもつ形声文字であり、白川（1994:585）でも形声としている。ところが甲骨文Ｂでは「弓」の右側に「攴」（「ぼくにょう・とまた」などと呼ばれる部首で、木の枝を手にもって打つ意味）があって、明らかに会意で、「弓弦を鳴らす」意味である。

４．２　「囚」について

「囚」は、現行の字体と少し違って、「人」が「囗」（「くにがまえ」と呼ばれたりする部首）から少し上にはみだしているが、囲いの中で人が横になっている形となっている。白川（1994:405）では、死体を棺中に収める形（つまり行動を表すもの）としているが、意味は「囚人」だという。

４．３　「占」について

「占」は、一般に「卜を言う」意味の会意といわれる（小川他編1968/92）が、白川　（1994:515）流にいえば、「卜」（甲骨に刻んだ文字）を祝寿の器に入れた形で、「神に祈りながら占問する」行動を表す意味という。

４．４　「茲」について

形としては「幺」（いとがしら）を二つ並べたもので、糸たばが二つ並んでいる形（白川1994:383）となっている。後世の形には、「くさかんむり」が加わる。ただ、使い方としては、「これ」「この」という指示詞に使われるので、会意の原理で作られた字の音を借りて、別の意味で使う「仮借」というカテゴリーにあたる。

４．５　「逐」について

「逐」も、現行の形と違っており、頭を上に縦に描いた獣の形の下に「しんにゅう」ではなく、「足跡」の意味である形（後の「止」にあたる形）があるので、獣を逐うという行動の意味となる。

４．６　「馭」について

「馭」の場合も、「逐」の構造に似ており、頭を上に縦に描いてある馬の形の下方に後の「又（右手）」に相当する形があり、（馬子が）右手で馬をコントロールするという行動の意味である。

４．７　「墜」について

「墜」は下の端に書いてあるせいかやや不鮮明だが、判明できる限りでは、「土」がない。白川（1994:612）では、「墜」の下に甲骨文字の三つの字体の一つとして挙がっているが、説明は「隊」のみに触れ、ここでの字体は触れられていない（「隊」は「墜」の初文（つまり原形の一つと説明している）。

サンプルの字形は「隊」と違って、後の「阜（こざと）」にあたる梯子の形が右側にある。白川の説明では、「阜」は神が地に降り立つと信じられた神梯の形である。左側の形について松丸・高嶋（1994:382）を見てみると、左と右が入れ代わった形も挙がっているが、後世の字体として挙げられている諸説を見ても、よく分からない。ただ、「土」がついている形の中で一つ参考になるものがあって、「土」の上の形が「こざとへん」に「入」と示してある。そして、（中国語の）説明として、「象人从阜上下墜之形（人を象り阜に従う。上下墜つるの形。）」とある。しかし、右側は明らかに「人」ではない。ところが、180度回転してみると、右側が「人」を逆さにした形だということが分かる。つまり、この場合は神梯ではなく、梯子の上から人が逆さになって落ちてくるということになる。

４．８　「夢」について

「夢」は一般に形声とされる（小川 1968/92 など）が、白川（1994:816）は会意としている。字体は後世と違って、左側が「爿」（しょうへん）となっている。また右側は「蔑」などの上半分の部分で、人の目に飾りがついているような形。白川（1994:769）の「蔑」の上部要素（現行の字体は存在せず）に対する説明によると、「目の上に呪飾りを加えたもので、巫女などが呪儀を行うとき、目の呪力を加えるため睫飾りなどする形。」「爿」は「牀」（床）の初文（原形）で、寝台のことである。

白川（1994:816）の「夢」に対する説明を見ると、夢（夢にしょうへんを加えた形）は「神霊の啓示としてあらわれるもので、その啓示をもたらすものは媚とよばれる巫女」とある。つまり、この字ももともと働きかけが含まれているわけである。

さらに注目されるのは、この甲骨文 B の字体である。白川（1994:816）の甲骨文字体には挙がっていないが、右下に明らかに「攴」（ぼくにょう）がついている。つまり、右側が左側（床で寝ている人間）に対して行動している。白川（1994:816）の言葉を借りると、「・・・呪霊は、人の睡眠中に夢魔となってその心をみだすもので、夢はその呪霊のなすわざとされた。」。

４．９　会意と思われるその他の字

よく分からない字が他に二つほどあるが、会意の可能性がある。一つは、「口」（「くにがまえ」）の中に「卜」で、「とが」などと読まれるらしい。もう一つは後世の俎（まないた）にあたるらしいが、「且」のような形に「夕」（おそらく「肉」の形）が二つある。いずれにせよ、白川（1994）にもなく、音読みが分からないので、会意かどうか不明といわざるを得ない。

４．10　甲骨文のサンプルから抽出される「会意」の性格

上記のサンプルに共通するものは何かと言うと、二つの要素が同等に組み合わさった場合に想定されるような、静的な意味ではなく、一つの要素がもう一つの要素に対する行動を表す関係を示している。言い換えれば、動的な意味の漢字である。一部の字（逐・馭）が縦に並んでいるのも、馬の後方から手が操作を加えたり、足跡が獲物を逐っていくなどの動作を示しているからである。

上記 4. 4 だけが例外で、二つの物を加算的に並べることによってある静的な「もの」を表現している。

５．学習書でよく取り上げられる基本的な会意文字の正体

「信」は甲骨文や金文には見えないが、神に誓約する行動、またその言葉を表す（白川 1994:470）。また、「安」については、「新しく嫁いできた婦を、その家廟に入れて・・・祖霊にその安寧を求める」行為を示しているという（白川 1994:379）。

「字」も儀式で、「家廟に子の出生を報告する儀礼」を指しており、字（あざな）もそのときに付けられる。

「明」はもともと左が窓の形があるといわれ、窓から月の光（神明）が入る形を示している。古くから「明」の形もあったが、その由来は不明である。後にその形に統一された（白川1994:417-8）。松丸・高嶋（1994:207）を見ても、よく分からず、「地名」とか、「名と同じ」（1994:31）などとなっている。少し目を引くのはせいぜい「午前６時説」（1994:207）で、月がまだ残っているところに太陽が昇って明るくなるような解釈である。

「休」というのもどうもよく分からないが、（白川 1994:171-2）では、軍の表木のことで、表彰を受ける行動を指すという。

６．会意形声について

「会意形声」という用語は小川他編（1968/92:1182-3 など）で使われるが、「形声」との区別はやや分かりにくい説明となっている。要点だけをいうと、「形声」はもちろん音符（または声符）をもつ文字を指すが、その範疇のなかで狭義の「形声」は江・河のように、「水」という意符に「純粋な」音符を加えたものをいう。それに対し、ある一定の意味範囲を表す要素に発生した引伸義を区別するために意符（部首）を加えたものをいう。例えば、「工」は「のみ」、または「さしがね」のような道具の形だが、その音符をもつ漢字群を見ると、功（力をこめて道具を使う、はたらき）・攻（のみをもって物を作る、おさめる）・空（のみで突き通したあな）などと、共通して「工作」にかかわるものとなっている。つまり、もとの「工」にできたいろいろな関連性のある意味の違いを、意符（部首）をつけることによって書き表したものを指している。

白川（1994:6）では、「会意形声」という用語は使われていないが、小川他編（1968/92）の説明に関連する部分を見てみる。上記3.に述べた作業仮説に照らし合わせると、基本的な立場は、会意と形声の区別は、字の要素を意符とするか音符とするかによって決まるという。つまり、音符らしいものの有無ではなく、音符らしいものがあってもそれが意符と解釈されれば、会意となるということである。白川（1994:6）の例で説明する。「敲」はいうまでもなく「高」と同じ音読みなので、形声に見えるが、「高」を要素にもっている漢字の一部に「高」＝　頭蓋骨という系列がある。その中で「敲」は上記3.でも触れた「ぼくにょう」（木の枝を手にもって打つ意味の部首）との組み合わせなので、「頭蓋骨を敲（たた）く（儀式の）」意味を表している。つまり、右側の要素が左側の要素に対する動作を表しており、同時に「コウ」という音声も表している。一方、槁・稿などの漢字群は「枯槁にして色を失い、白くなったもの」で、意味範疇を示す部首が加わったもので、形声文字となる。しかし、小川他編（1968/92）の説明では、それが会意形声となる。一方、小川他編（1968/92）で狭義の形声としているものは、白川（1994）では「本来の形声字」とし、「河」などのような固有名詞に多いという。

上記の「敲」のように、もともと音符と無関係に構成されている字については、白川（1994:6）

は「会意にして亦声」と呼んでいるが、やや分かりにくい用語のため、ここでは「会意形声」とする。つまり、本稿でいう「会意形声」とは、「本来は会意文字だが、部首でない部分が同時に音符として働いているもの」をいう。

この「会意形声」という範疇の文字も当然「会意」の一種で、上記 3.、4. で見た会意文字の特性をよく表している。つまり、二つの要素からなる字の場合、それらが同等の関係で並べられているのではなく、一つの要素がもう一つの要素に対して働きかけるという行為を示している。

７．加算的な会意文字

会意文字がすべて上記のようなダイナミックなものかというと、そうではなく、要素要素がいわば対等な関係にあるものもある。上記の「茲」の初文もその系統だが、「林」・「昌」・「絲」・「炎」のように同じ要素が二つ、あるいは三つ（森・晶・磊・轟）が並ぶものに多いようである。

しかし、こういった字の中にはダイナミックな組み合わせもある。「品」は祭品が三つ並んでいる形で、「種々の祝寿をあわせて行うこと」（白川 1994:729）で、「従」の初分は「人」が二人並ぶ形で、「軍事や祭事に随行・随従する」意味に使われることが多い（白川 1994:415-6）。

８．漢字教育に対する提言

見てきたように、加算的な会意文字は同じ要素を並べる漢字に典型的に見られるもので、それは会意文字の中でも特別なグループというべきだろう。同じものを二つ三つ並べることによって物事の度合いを表すことはたいへん分かりやすく、学習者の納得しやすいものと考えられる。

一方、一部の学習書などの「明」に関する説明はわけが分からず、いかにも論理的な思考に反するもので、少なくとも成人学習者に対しては無理がある。「窓から差し込む太陽の明るい光」など歴史的な変化を引っ張り出さなくとも、せめて上記のような、「月がまだ残っているような早朝の時に、明るくなる」とでも説明すれば、いくらかは納得がいくだろう。全体として、同じ要素からなる会意文字以外では、加算的な説明を避け、よりダイナミックな説明が会意文字の本質に添っており、理解もしやすい。もちろん、字源の説明と、字形を記憶にとどめるための「覚え話し」とは本来別々のものでかまわないわけだが、安易に常識では理解できないような字源説明は漢字の不可解な、エキゾチックな側面を強調する結果になり、学習者の心理にマイナスイメージをもたらしかねない。

引用文献

１．阿辻哲次（1988）「漢字の分類―六書を中心として」佐藤喜代治編『漢字講座』第一巻、pp49-69.

２．石川九楊編（1996）『書の宇宙 1―天への問いかけ甲骨文・金文』二玄社

３．小川環樹他編（1968/92）『新字源』角川書店
４．加納千恵子他（1990）『基本漢字 500』Vol.1(第 3 版)、 Bonjinsha.
５．Kanji Text Research Group UNIVERSITY OF TOKYO (1993) *250 Essential Kanji For Everyday Use*. Charles E. Tuttle.
６．Keightley, David N.（1978）*Sources of Shang history: the oracle-bone inscriptions of Bronze China*. Berkeley: University of California Press.
７．白川静（1994）『字統』平凡社
８．DeFrancis, John（1989）*Visible speech: the diverse oneness of writing systems*. University of Hawaii Press.
９．松丸道雄・高嶋謙一（1994）『甲骨文字字釋綜覽』東京大学出版会
10．Lam, Martin and Shimizu, Kaoru（1995）*Kanji from the start: a comprehensive Japanese reader*. Kodansha International.